

浄瑠璃における「富士浅間物」の展開

『莠伶人吾妻雛形』・『粟島譜嫁入雛形』を中心に

韓 京 子

本稿では、浄瑠璃における先行作品の利用の一例として、謡曲『富士太鼓』が近世戯曲においてどのように脚色・改変されたのかを検討する。

舞楽上の争いから楽人浅間に討たれた楽人富士の妻が、形見の太鼓を敵と見立て、太鼓を打ち、恨みを晴らす『富士太鼓』の筋は、敵討ちとして近世演劇に採り入れられている。

所謂「富士浅間物」には、並木宗輔¹・並木丈輔合作『ふたばれいじんあずまのひながた莠伶人吾妻雛形』（享保十八年・豊竹座）、その改作である並木宗輔・竹田出雲・三好松谷合作『あわしまけいずよめいりひながた粟島譜嫁入雛形』（寛延二年・竹本座）、松貫四・吉田角丸合作『内百番富士太鼓』（天明三年・肥前座）などの浄瑠璃がある。

『莠伶人吾妻雛形』は、「富士浅間」の世界に、謡曲『弱法師』、説経『信徳丸』など中世以来の物語を、お家騒動風に仕立てた義太夫正本『弱法師』（元禄七年）を加えて脚色したものである。「富士浅間」の世界に「俊徳丸」の世界が取り合わされたのは、『世界綱目』歌舞伎御家狂言世界之部によると、「此世界に富士浅間を結ぶ事、趣向も莠伶人を始とす」と、『莠伶人吾妻雛形』がはじめであると記されている。しかし、享保八年五月、京布袋屋梅之丞座上演『俊徳丸比翼鳥甲』の角書に「富士太鼓／浅間伝授」とあることから、すでにこの作品にも、富士浅間の世界に俊徳丸の世界が加えられている²ことがわかる。内容が確認されるものとしては、其磧の浮世草子『富士浅間裾野桜』（享保十五年、改題再版本に『俊徳丸一代記』天明五年）が早く、後の黒本・青本（『富士浅間秘曲舞』）や黄表紙（『富士浅間物語』）、浄瑠璃・歌舞伎など

へ多くの影響を与えている。

この浮世草子『富士浅間裾野桜』は「富士浅間」の世界に「俊徳丸」の世界を結びつけ、お家騒動の要素を加味したものである。しかし、『莠伶人吾妻雛形』や、その改作『粟島譜嫁入雛形』では、義太夫正本『弱法師』や、同じく両作に影響を与えた浮世草子『富士浅間裾野桜』のようなお家騒動物としては描かれていない。

豊竹座初演の『莠伶人吾妻雛形』は、忠臣蔵騒動直後の竹本座で『粟島譜嫁入雛形』に改作される。『莠伶人吾妻雛形』は弟子格の丈輔との合作ということから、宗輔が立作者と見られており³、『粟島譜嫁入雛形』は出雲か宗輔のどちらが立作者であるかについては異論⁴がある。立作者は全体の構想を立て、三段目など一曲の要を書き、助作者は立作者から割り当てられた場を書くことと見られている⁵。内山美樹子氏の説⁶によると、竹本座には近松以来、親子恩愛劇を戯曲の中心に置く伝統があり、出雲が三ノ切には典型的親子恩愛劇を描くのに対して、宗輔はもともと三ノ切に悲観主義的運命劇を描くことが多かったという。また、宗輔が竹本座に入り、この二人が合作するようになってからは、三ノ切に悲観主義的色調を帯びた運命劇、四ノ切に親子恩愛劇が置かれるようになったと見られている。

これらの点を踏まえ、謡曲『富士太鼓』が浄瑠璃においてどのように展開されるかについて、『莠伶人吾妻雛形』から『粟島譜嫁入雛形』への改作の様相を中心に考察したい。

1. 舞楽の争い

まず、富士浅間物において対立の原因となる舞楽の争いについて考える。

この場面は「俊徳丸」の世界で、俊徳丸が天王寺での聖霊会において稚児の舞を舞うことに、「富士浅間」の世界で、天王寺の楽人浅間と住吉の楽人富士が内裏での管弦の役を争ったことを重ね合わせている。

浮世草子『富士浅間裾野桜』では、禅尼公の百年忌の大法事に、河内の長者

信吉は嫡子信徳丸か庶子次郎丸に万秋楽を舞わせることを命じられる。この秘曲は富士以外伝える楽人がおらず、楽人富士の妻となっている次郎丸の母千草は、一子相伝の秘曲を次郎丸に伝授させるため一時的に富士の養子とさせる。その千草は、

今度次郎丸殿に夫富士を頼み、秘曲を伝授させましも、兄信徳殿に増つて、御追福の御楽を首尾よくつとめさせまし。官加階あらば、をのづから人の用ひいやましに、その身の威勢強く成。惣領の威光は消て、つるには家継と成給はん。然る時は今こそなれ。次郎丸殿の家督になれば、母に紛れのないわらは。長者殿の御母儀さまとあふがれ、活計歓楽にくらさんと思ふて。

と、次郎が万秋楽を上覧することによって家督相続を狙っている。「富士浅間」の世界と、「俊徳丸」の世界が、舞楽上覧の名誉と家督相続という点で重ね合わされているのである。

ここで、浅間と富士の舞楽の争いは、一子相伝「秘曲」の伝授へと変化し、楽人富士と浅間の舞楽の争いという面が弟子の信徳丸と次郎丸を通じての争いという間接的なものとなる。

一方、『莠伶人吾妻雛形』では、北条時政の年忌用いの仏事に、河内国高安の長者通俊の一子俊徳丸は万秋楽を舞うことを命じられ、摂津国高津判官兼則の一子次郎丸は俊徳丸の身に差し支えが起こった際の代役を言いつけられる。

『富士浅間裾野桜』と違い、『莠伶人吾妻雛形』では、俊徳丸と次郎丸は他人となり、この二人が家督を争うお家騒動としては描かれないことが特徴である。

浮世草子『富士浅間裾野桜』では、浅間が知りもしない秘曲の伝授の要望を受け入れたのは、富士に対抗してではなく、富士を殺害したことも次のように懺悔して自害している。

其職にゐて存ぜぬとは、口惜さにいひがたく（中略）爰が俗言にしよくがたきといふ偏執きざし、我今此秘事を見覚し上は、世に富士なくば、おそらくは日本に一人の楽人と威名をかゝやかし、諸人に崇敬せられんものをと、我慢心指出。

と、あるように、謡曲『富士太鼓』における、富士の態度を憎み、殺すという、浅間の気性の荒さは表れていない。富士も妻千草の家督横領の計略を知って、次郎を養子として秘曲を伝授しているのではない。富士と浅間、二人をめぐっての対立という構想をとっておらず、また、舞楽の優越争いとしての性格は薄れているといえる。

一方、『秀伶人吾妻雛形』では、俊徳丸の師匠に富士、次郎丸の師匠に浅間と、『富士浅間裾野桜』とは逆の設定がされており、俊徳と次郎が家督ではなく舞楽上覧を争う上で、浅間が次郎側の佞臣役として描かれる。浅間については、

舞楽の家に生れながら酒宴おごりに長ぜし故。家業の芸も身軀もうすきひとへのやれ紙子。見かけよりなを内証は火打の石のかたづまり。くらしかねたるうき渡世。

と、不誠実な印象を与えている。さらに、浅間は富士の妹である妻が、夫が知りもしない万秋楽の伝授を請け負ってきたことに異見すると、殴る蹴ると暴力を振るう。その挙句、富士殺害の企みを知られ、切り殺してしまう悪人として描かれる。舞楽を争うためではなく、浅間は栄耀、歓楽のために、富士から秘伝の一卷を奪うことで、次郎に伝授しようとする。ここでは、浅間を次郎丸の師匠として設定を変え、浅間のあくどさをより強調し、悪と善との対立を明確にしたものと思われる。

『粟島譜嫁入雛形』では、富士と浅間との舞楽の争いという点は前面に描かれていない。富士は、「太鼓は天下の名人ゆへ勅詔の趣有」と召し出され、侍種の中将から住吉へ奉納する神宝について、次のような話を聞く。

粟島明神住吉より流され給ひし時、神楽の太鼓あやの巻物、二つの宝を空穂船にのせ紀州蚊田に送られしより、住吉の神楽に太鼓なきは其遺風と伝へ聞り。此度天皇勅願の子細有って、彼神宝を改め作り住吉への御奉納太鼓に妙を得たりし富士承って式掌の神楽を勤奉れとの勅詔也（中略）古例を以てあやの巻物神楽の太鼓を奉納とは偽り。高時調伏の御神楽を、此太鼓にて

打ッならば、音は出ず共高時を調伏は疑ひなしとの勅命なりと有けるにぞ。

富士は、神楽の秘事を記した巻物を読むことを許されるが、それは、相模入道高時を調伏する願文で、神楽の太鼓には高時の人形が入ったものであった。富士は高時より禄を受けていることから躊躇うが、違背すれば朝敵と迫られ、やむなく命令を受け入れる。勅命によって舞楽の役を勤める謡曲『富士太鼓』の設定を取り入れ、富士に勅命として、高時調伏の太鼓を打つ役割を担わせている。

この『粟島譜嫁入雛形』では、『富士浅間裾野桜』、『秀伶人吾妻雛形』同様、富士が子へ秘曲を伝授する場面が描かれる。秘曲の伝授の際訪れた浅間に、富士は鎌倉調伏の事を打ち明けるが、

是といふもお手前が芸の未熟からおこつた事 信濃なる浅間の獄ももゆるといへば、富士の煙のかいやなからん。右京の進は太鼓の下手。此浅間は太鼓の名人。じたいそち達が芸で左衛門と肩をならべうなんど、はおろかおろかと、頼みも聞き入れず帰ってしまう。太鼓の芸の優越から、富士と浅間の対立が、鎌倉と朝廷の対立へと展開しているのである。この富士と浅間の対立を示す場面は、後、富士の妻子、要人が、浅間を富士の敵と狙うきっかけとなるが、このことについては、後にあらためて取り上げる。

『富士浅間裾野桜』以後の作品では、舞楽の争いの面で「秘曲」の伝授という、謡曲『富士太鼓』にはない場面が設けられている。公の場で万秋楽という秘曲が指定されており、この秘曲は唯一人しか伝えるものがないという設定がされる。『秀伶人吾妻雛形』、『粟島譜嫁入雛形』では、秘伝の一卷、神宝などと、宝がまつわる話となる。原道生氏によると^⑦、お家騒動劇では「正統性の象徴としての宝物を中核とする作劇」がされ、また、「お家の宝ではなく天子よりの預かりの重宝」と変化することで公的な責任に関わる事柄として発展するといわれている。ここでも同様といえる。舞楽においては、秘曲自体が宝で、その秘曲の伝授こそ正統性を表し、富士・浅間のどちらが優越しているかを端的に表すものである。また、神宝と設定することで、家の対立から、さらに鎌

倉と朝廷の対立へと展開している。

『莠伶人吾妻雛形』、『粟島譜嫁入雛形』では、浮世草子『富士浅間裾野桜』では見られなかった、秘伝の巻物、神宝をめぐる展開が繰り上げられるなど、近世的演劇の体裁が一部整えられたといえるだろう。

2. 業病平癒

先述したように、浮世草子『富士浅間裾野桜』、『莠伶人吾妻雛形』、『粟島譜嫁入雛形』では、「俊徳丸」の世界の業病平癒の部分を取り入れている。浮世草子『富士浅間裾野桜』では、俊徳丸のらい病は、仲光の計略による仮病とし、説教的な部分を排除するなど新しい設定を用いている。一方、『莠伶人吾妻雛形』、『粟島譜嫁入雛形』では、それを運命劇として描いているところが特徴である。

『莠伶人吾妻雛形』では、俊徳丸は次郎丸に勧められた毒酒を飲んだことでらい病となる。説経『信徳丸』では、継母の呪いによるものであったが、ここでは、舞楽の役を奪うために人為的にらい病にさせている。俊徳のらい病平癒には、寅の年月日の揃った日生まれの女の生血が妙薬といわれている。その生まれの富士の娘初花は、俊徳のために自らの命を犠牲にする。

俊徳様らい病にて医療も叶はず。寅の年月揃ふたる女を尋給ふと聞。我生れし年月に合たこそ幸なれ。とてもこがれて死る命。いとしひ人のお為にと。家出をして河内の高安迄行しかど。はや此所へ捨られ給ふ由。又も尋さまよひきて（中略）恋人のためにかくは成しぞや。生ながらへても及ばぬ恋路。色に負けても思ひにまけぬ女の一筋とあきらめて捨てる命。

と、初花は、身分違いの恋故、叶わない恋と、諦めて命を捨てている。ここでの業病の平癒は、説経『信徳丸』、義太夫正本『弱法師』と同じく俊徳丸を愛する者によるとしながらも、宗教的な力ではなく、自らの意思により差し出された命によるものとしている。この初花はすでに浮世草子『富士浅間裾野桜』において、乙姫の身替りに自害する人物として登場していた。乙姫の家臣頼母

は、乙姫の不義がばれないように、俊徳丸宛の艶書を自分の妹初花のものとして、難を逃れていた。この艶書の件から、初花を実際に俊徳に恋慕する設定と改め、自ら恋人のため進んで命をささげる人物とした。諦観視した運命劇的な雰囲気は持つものの、丈助との合作期に特徴的である人間の意志を追及する面が見られる場面である。

一方、『粟島譜嫁入雛形』では、粟島神社をめぐる故事を取り入れ、粟島姫は両足が立たない病気となっている。ここでも、粟島姫の病気の妙薬には男女の双子の血が必要とされている。討手を殺した咎で捕らえられている父六作の助命に来たお長は、粟島姫の継母桂御前から、六作の替りに、お長の双子の子供の命を求められる。桂御前は、

人の子のかはゆさも我子のかはゆさも同じ事。わらはが産し姫ならば何しにかふといひませう。先御台のお子故に姫の病気を直さいでは姫に家をつがさいでは。先殿への言訳も先御台への義理も立ず。

と、義理のため姫の命を助けたいのだと語る。継母が義理のため継子の命を助けることは、竹本座の伝統的親子恩愛劇といえる。しかし、「義理程むごい胸欲なつれないものはないわいの」と、義理のために命を捨てることへの懐疑とも思われる言葉が発せられている。この部分が以前の竹本座の劇にはなかった部分といえるだろう。竹本座における純粋な義理による犠牲ではないのである。

お長はやむなく双子を父親の身替りに差し出したが、思いがけなくも、桂御前が自害した姿で現われる。桂御前は自らも双子であり、両方揃わずとも、せめて姫の片足だけでも治癒するようにと犠牲になったこと、また、子供の命を求めたのは、姫が継母の血を飲んだと噂されないように偽ったものだったことを語る。しかし、自らの意思による行為ではなく、この場では繰り返し見る「霊夢」（「霊夢は正しく我血汐をあたへよとお告ならん」）によるものとして、作者は桂御前を逃れたい状況へと追い込んでいるのである。また、この犠牲死を「乳母の鑑」と称えていることから、継母としての義理ではなく、乳母としての忠義による犠牲死とするなど、竹本座的な純粋な親子の恩愛劇とは

距離があるようにみえる。

『粟島譜嫁入雛形』での継母の犠牲死は、『莠伶人吾妻雛形』同様、特殊な出生の条件を持った人物の運命として捉えられている。さらにここでは、男女の双子の血を必要とすることで、離れ離れとなっていた兄弟のめぐり合いを、運命的なものとして描いている。

桂御前の話から、自分がその双子の片方だと知った六作は即座に自害する。その場面には、

一所に廻りあふ事も有まいと思ひしに死る今はの対面とははかない縁の血の
別れと。悔を聞いていやいやそふではないそふではない。産れた時も一時死ぬ
る時も一時とはためしまれな深い縁

との桂御前との会話がある。決して「はかない縁」ではなく「ためしまれな深い縁」と、あらかじめ決められた縁、運命として受け止めている。そして、この場の兄弟の名乗り合いにおいても単に偶然な出会いとしてだけではなく、運命的な出会いとしている点も、宗輔の特徴といえるだろう。

この『莠伶人吾妻雛形』、『粟島譜嫁入雛形』は、作者の担当部分について異論があり、『莠伶人吾妻雛形』は、立作者の宗輔が二・三・四段目を執筆しているとみられている。『粟島譜嫁入雛形』については、森修氏は四段目切、内山美樹子氏は実質的には宗輔が立作者とみて三段目切を執筆しているとみている⁸⁾。運命劇をほとんど出雲が手掛けなかったことを考えると、この両作品における運命劇の場面である三段目切は宗輔によるものと考えられる。

先述したように、出雲と宗輔が合作するようになってからは、三ノ切に悲観主義的色調を帯びた運命劇、四ノ切に親子恩愛劇が置かれるようになった。しかし、宗輔が意識的に竹本座の伝統を受け止めた結果、四ノ切だけでなく三ノ切においても親子恩愛の愁嘆が取り入れられていると見られている。『粟島譜嫁入雛形』の三ノ切が、親子恩愛劇的側面を持つ運命劇として描かれているのも、このような結果によるものといえる。

3. 敵討ち

謡曲『富士太鼓』は、「富士浅間」物においては、楽人富士の敵討譚として展開され、その敵討ちの場面には様々な工夫が施されてきた。「富士浅間」という制約された世界の中で、作者が趣向をめぐらした部分といえよう。

浮世草子『富士浅間裾野桜』と、『莠伶人吾妻雛形』、『粟島譜嫁入雛形』に共通する点は、謡曲『富士太鼓』や『内百番富士太鼓』などでは浅間が富士を殺害したことが明白であるのに対し、富士を殺害した犯人が誰なのかがわからないことである。

浮世草子『富士浅間裾野桜』では、継母は、家督横領の邪魔になる俊徳丸側の忠臣、仲光を排除するために、富士殺害の犯人に仕立て上げていた。一方、『莠伶人吾妻雛形』では、乙姫の家臣頼母は、秘伝の巻物を握り締めた富士の片腕を持った曲者を見逃したが、かえって自分が犯人とされてしまう。『粟島譜嫁入雛形』では、浅間が富士を殺害し、首を切り立ち去ったものと見られており、富士の妻子は浅間を敵と狙うが、四段目切になって、実は富士は生きているということが明かされる。「富士浅間物」において、富士が浅間に殺害されることが大前提であるので、富士が生きていることは、観客の意表をつく設定であった。ここでは、それを「心底」の趣向を用いて描いている。

『粟島譜嫁入雛形』では、まず、二段目で見られた富士と言い争いについて、浅間の娘から次のように明かされる。

思案の果は腹切て死ふとの思しめし。と、様への物語。天知地知人しつて調伏との疑ひかゝる。腹切死テは此太鼓いよいよ不審かゝらんと言合はせての申違ひ。覚悟の上で手にかけて意趣切との風聞させ。けふ迄隠しとげ給ふ。二人の言い争いが、実はあらかじめ言い合わせたものという、浅間の「心底」がいったん語られる。この段階では、まだ、富士が浅間に討たれたことになっていたが、狂乱した千枝が切りつけた太鼓の中から富士が現われる。浅間は藤太を殺して富士の衣装を着せ、それとわからぬように首を切り、富士を匿っていたことを明かす。鎌倉方と見せ、実は朝廷方であったのである。

この場面には、謡曲『富士太鼓』における富士と浅間の反目関係が、心底の趣向を描くために利用されている。森修氏や近石泰秋氏の説⁹によると、このような観客の意表をつく趣向、作中の人物が秘密を持って行動し、観客もそれを知らないという趣向は、宗輔によく見られる特色であった。そして、その「心底」が一度で明かされず、二重に包まれている凝った趣向となっている。

さらに、この四段目切には、この時期の竹本座に特徴的である、四段目の親子恩愛劇をも、この心底の趣向を用いて描いている。浅間が実は富士を助けていたという心底を「欺す心底」とすると、「隠す心底」の趣向を用いて、親の子を思う愛情が表されている。

意趣ある仲と見られていたが、意外にも浅間は富士と子を取り替えて育てていたことを打ち明ける。

養子といふ事隠したも語明さばそち達か、又もはや死はせまいかと逢たい見たいを堪忍して顔見にくるな行もせぬ。大きう成たか達者なかと。問ふは互いに舞楽の庭（中略）親の慈悲を聞に付有がたいに取交て。お精が身には恥しき親に添臥せうと迄思ふたは何事ぞ。まだ其上に此刀で殺そふといふ様な大それたまあ勿体ない。イヤおまへ斗りじやないわたしがほんのと、様の敵を討たすまいといふ。こんな不孝も有ふかい。

浅間は事実を明かしては子が無事に育たないと、いつまでも隠しておこうと努力したが、やむなく打ち明ける。そして、あくまでも富士の敵として娘たちに討たれようとする。事実を聞かされた娘たちは、父の敵を討てと迫る浅間に対して、実父・養父であることから討てず、実の父を討とうとしたこと、一方、敵を討たすまいとしたことなど、今までの自分たちの行動を不孝と嘆く。

このように、浅間の心底が明かされることで、実と義理の親子の間の恩愛・義理が語られるなど、敵討ちをめぐる親子の恩愛が色濃く描かれる場面となっている。

おわりに

以上、浮世草子『富士浅間裾野桜』も視野に入れて、『莠伶人吾妻雛形』、『粟島譜嫁入雛形』における「富士浅間物」の展開を見てきた。いずれも、舞楽の争いという面は薄れ、秘曲、秘伝の巻物にまつわる物語として展開している。この点は後、『内百番富士太鼓』へも影響を与えている。

『莠伶人吾妻雛形』、『粟島譜嫁入雛形』の両作品には、宗輔が関わっており、業病平癒にまつわる場面を運命劇として捉えたところに、その作風が窺える。両作品とも二段目に富士殺害、三段目に業病平癒、四段目に真の敵が判明する場面が描かれている。『莠伶人吾妻雛形』三段目では、初花は自ら進んで命をささげるが、運命劇的な諦観の雰囲気をも漂わせていた。本稿では取り上げなかったが、四段目では、真の敵の判明にまつわり、頼母の武士としての義理が主に描かれていた。その改作『粟島譜嫁入雛形』では、出雲（竹本座）の特色が加わり、三段目には悲観主義的運命劇だけではなく親子恩愛劇側面も持ち合わせた場面となっていた。四段目には、宗輔の特徴ともいえる観客の意表をつく趣向を取り入れた、竹本座の典型的親子恩愛劇が描かれていた。

『莠伶人吾妻雛形』が上演された当時の豊竹座では、藤井小八郎がおやま遣いであったことから、また、豊竹越前少掾の美声を生かすため、女性を主人公とする場合が多かったといわれている^①。『富士浅間裾野桜』における初花を『莠伶人吾妻雛形』で改めて運命劇の中の人物として捉えなおしたのも、作者だけではなく、このような人形遣いや太夫の影響もあったのであろう。

太夫の芸風と戯曲内容との関係については、今後の課題としたい。

[注]

- (1) 千柳と称した時期もあるが、本稿では宗輔で統一する。
- (2) 石川潤二郎「江島其碩作『富士浅間裾野桜』の研究」（『近世中期文学の諸問題』所収、昭和四十一年、明善堂書店）。
- (3) 内山美樹子「延享寛延期の竹本座の作品と並木宗輔」（『演劇研究』昭和四十三年十月、後に「菅原伝授手習鑑」などの合作者問題」で『浄瑠璃の十八世紀』所収、平成元年、勉誠社）。
- (4) 注3、森修「浄瑠璃合作者考」（『近松と浄瑠璃』所収、平成二年、塙書房）。

⑤西沢一鳳軒『伝奇作書』初編（天保十四年序）

竹田出雲、並木宗助、近松半二出で浄瑠璃の脚色段々巧になり、一通りの作には聞者も看官も承知せぬことに成り、譬はゞ作者三人あれば場割とて、建作者より誰は二の切、かれは序切、誰それは四の切と二の口、我は大序と三段の切を書なんど、一場ノへと割付合作する様になり

⑥内山美樹子「寛延二・三年の竹本座一作者と太夫」（『文学・語学』昭和四十四年十二月）。

⑦原道生『双生隅田川』試論（『国語と国文学』平成十年十月）。

⑧注3、注4。

⑨注4 森修前掲書、近石泰秋『操浄瑠璃の研究』（昭和三十六年、風間書房）。

⑩川口節子「豊竹越前少掾の活躍」『黄金時代の浄瑠璃とその後』岩波講座歌舞伎・文楽第九巻、平成八年、岩波書店）。

*** 討議要旨**

山下則子氏は、改作前後での相違は何か、と尋ね、発表者は、業病平癒の部分が運命劇として描かれているのは共通するが、竹本座に移った改作後の方は親子恩愛劇という面が強くなっている、と答えた。

木越治氏は、お家騒動でなくなった理由は何か、作者の性なのか、と尋ね、発表者は、むずかしいところだが、宗輔が忠義よりも運命的なものを描きたかったからではないか、と答えた。